

パフォーマンス

降り積もる<からだ>：「未来身体」2001

洋服なんて、布を丸めたただの筒だ。なんでそんなにこだわるのか。しかし、それを言うなら、からだだってただの筒だ。でも、ぶよぶよした、厚みのある筒だ。口が入り口で、肛門が出口。

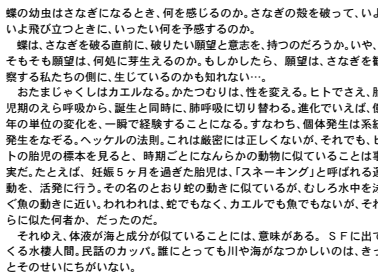
服にこだわるのは、たぶん、自分がかっこうよく見えるから。着ている自分の気分が、よくなるからだろ。

衣服は、他人の視線をさえぎる。つまり、皮膚を視線から隠す。自分を他人から隠す。そして同時に、他人の視線を受け止める。心の皮膚、自意識の皮膚になる。覆い隠すと同時に、さらけ出す。

ということは、...むき出しの皮膚そのものが、もともと意識の皮膚だったとかか。<他人のからだ>でさえ、視線接きでは語れない。おそらくは、<からだ>がモノだ、と思ひ込むことが、そもそもの間違い。いや、そもそも、<からだ>がモノだ、と思ひ込むこと、そのことが、<からだ>を心にするのだ。

わたしたちが、たこのような、火星人のようなからだを持っていたらしよう。ファッションはどんなものになっているか。わたしたちが、今と同じからだを持ち、しかし猿人の脳を持っていたらはいはどうか。そのばあい、どのような整形手術をのぞむか。

化粧やエステ、エクササイズと、ファッションやモード、そして整形手術。その深層には、確かにある共通の根深い願望が横たわっている。



蝶の幼虫はさなぎになるとき、何を感じるのか。さなぎの殻を破って、いよいよ飛び立つときに、いったい何を予感するのか。
蝶は、さなぎを破る直前に、破りたい願望と意志を、持つのだろうか。いや、そもそも願望は、何処に芽生えるのか。もしかしたら、願望は、さなぎを観察する私たちの側に、生じているのかも知れない...。
おたまじゃくしはカエルなる。かたつむりは、性を変える。ヒトでさえ、胎児期のえら呼吸から、誕生と同時に、肺呼吸に切り替わる。進化でいえば、億年の単位の変化を、一瞬で経験することになる。すなわち、個体発生は系統発生をなぞる。ヘッケルの法則。これは厳密には正しくないが、それでも、ヒトの胎児の標本を見ると、時期ごとにならぬかの動物に似ていることは事実だ。たとえば、妊娠6ヶ月を過ぎた胎児は、「スネーキング」と呼ばれる運動を、活発に行う。その名のとおり蛇の動きに似ているが、むしろ水中を泳ぐ魚の動きに近い。われわれは、蛇でもなく、カエルでも魚でもないが、それに似た何かか、だったのだ。
それゆえ、体液が海と成分が似ていることには、意味がある。SFに出てくる水棲人間。民話のカッパ。誰にとっても川や海がなつかしいのは、きっとそのせいにちがいない。



サイボーグに生まれ変わって、超人的な力を発揮してみたい、なんて思いませんか。それが無理なら、必要なときだけ、服を着るようにロボットを着て、休むときには服を捨てたいとか、空飛ぶロボット、テニスの強いロボット、目と耳の超敏なロボット、そして、パーティー用のフェロモン・ロボット。服のように、好きなように使い分けてみたいですね。
限界があるのは、わかっています。世の中には、できること、できないことがある。テクノロジが進んでも、物理法則の壁は超えられない。超能力がナンセンスなのと同じように、それでも、夢を見ることを止めることは、誰にもできないはずだ。
まわりが皆、ミュータントや、サイボーグだったら、どうなるんでしょう。彼らの視線に晒されたら、私たちの身体感覚は、どうなってしまうのでしょうか。<からだ>の軸に、狂いが生じるかも知れない。たとえば、拒食症や多重人格は？サイボーグは、はじめて食べないはずだし、それに、多重人格を標準的に備えているサイボーグがいたら。「離人症」なんて病気は？そう、離人症。自分のからだや経験がリアルティを失って、存在自体が希薄になってしまう病気。
人間としてのリアルティを失い、生きている感覚を喪失する。しかしサイボーグに、そんな感覚はあるのでしょうか。そもそも、われわれは本当にそんな感覚を自覚から持っているのでしょうか。リアルティの感覚そのものが、幻覚なのかも知れない...。



洋服なんて、布を丸めたただの筒だ。なんでそんなにこだわるのか。しかし、それを着ようなら、からだだってただの筒だ。でも、ふよふよした、厚みのある筒だ。口が入り口で、肛門が出口。服にこだわるのは、たぶん、自分がかっこうよく見えるから。着ている自分の気分が、よくなるからだろう。

衣服は、他人の視線をさえぎる。つまり、皮膚を視線から隠す。自分を他人から隠す。そして同時に、他人の視線を受け止める。心の皮膚、自意識の皮膚になる。覆い隠すと同時に、さらけ出す。

ということは、...むき出しの皮膚そのものが、もともと意識の皮膚だったということか。他人のからだでさえ、視線抜きでは垂れない。おそらくは、<からだ>がモノだ、と思いつくことが、そもそも間違いないや。そもそも、<からだ>がモノだ、と思いつくこと、そのことが、<からだ>を心にするのだ。

わたしたちが、たこのような、火星人のようなからだが持っていたらしよう。ファッションはどんなものになっているか。わたしたちが、今と同じからだを持ち、しかし猿の脳を持っていたばあいはどうか。そのばあい、どのような整形手術をぞむか。

化粧やエステ、エクササイズと、ファッションやモード、そして整形手術。その深層には、確かにある共通の根深い願望が横たわっている。

<死体>は、どうだ。ただのモノだろう。どうして、あんなに衝撃を与えるのか。

腐って、うじの湧いたくしい>。目無しのかげ体>。目だけのく姿態>。ホルマリン漬けの胎児。スラスラ状の標本。内臓の、くっきりしたピンク色の輪郭。脳、という名の、茶色の臓。わずかにはみ出した産毛。どうして、あれほどの喚起力を持つのか。

忘れていた、自分の死を連想させるから？自分が、一面ではモノであることを、否応なく認識させられるから？ただただ、無惨に破壊され、腐っていくから？自分と酷似しているが、似ても似つかない異臭を放つから？石ころや木ではなく、他の動物の死体でもなく、壊れたサイボーグですらなく、他の何者でもないから？つまり、われわれ人間の死体だから。

つまりは、そういうことか。生きているわれわれなしには、死体のインパクトはない。もし、生きているわれわれの<からだ>とあらゆる点で、似ても似つかない死体があるとすれば？そんな死体があるとすれば、それはもはや死体ではない。紛れも無かつたのモノだ。

<死体>は、私たちの心とからだの<間数>である。だからこそ、死体を見たら、ただやみくもに吐きたくなる。



君のからだはそのままで、記憶と人格を全部入れ替えたとして。それでも、君は同じ君か？

当然、その入れ代わった新しい人格の方が、「私は私」と主張する。でもそれは、元の君とは違う人格のはずだ。

しかし、それは客観的に外から見た「君」のことであって、「私は私」と主張している「私自身」にとっては、連続性と同一性がある。これが、問題のひとつ、というのも、私の連続性、とは、徹頭徹尾、主観の問題だから。それなら、逆に、私の記憶はそのままで、その記憶を新しいからだに移植した場合はどうなるのか。今度は<私自身>が、新しいからだに乗り移って、連続性を主張するわけだ。だが、これは本当だろうか。<からだ>のディテールの感覚なしに、私の連続性を知覚することは、可能なのだろうか。

少なくとも、そうした身体感覚の、ヴィヴィッドなメモリが必要なのではないか。<じぶん>の同一性が、からだの記憶に依存していることだけは、どうやら確からしい。

それにしても、不思議なことがある。同じ問題が、自分の身の上で起きたと想像するときと、君や他人の身の上で同じことが起こると想像するときで、印象がまったくちがう。結局、人格の同一性って、何なのだろう。



からだを改造することは、悪いことだろうか。杖をつくことは、別に悪くない。めがねも、コンタクトレンズも、悪くない。服はもちろんのこと、車も飛行機も、金さえあるなら悪くない。化粧も、整形手術も、遺伝子の操作による病気の予防や健康の改善も、丸ごと否定できる人はいない。アルコールは依存性がコカインなどに次いで高い薬物だが、法的に許容されている。ならば、記憶を向上させる薬、気分を爽快にする薬だけが悪いという理屈は、通らない。人は自然な状態が一番、と言うなら、「むしろ、身体と環境を加工する能力だけが、ヒトと動物を分けた」と反論しよう。...しかし、そう言い放ったあとで、ふと唇が寒くなるのも事実だ。この不安は何なのか。半世紀後に、われわれの<からだ>は、どうなっているのだろうか。